法華経　日めくり

令和６年　甲辰
２０２４年
６月　１日　土曜

仏滅 婁
旧４月25日

妙法蓮華経五百弟子授記品第八

富楼那（ふるな）の授記

「富楼那の授記」

お釈迦さまは、説法第一といわれる弟子の富楼那が過去世において九十億もの仏に仕え教えを弘めてきたこと認め、法明如来という仏に成れると授記を与えました。

富楼那は雄弁というだけではなく、身命をかけて教えを弘めるという決意をもった人でした。その決意をもって、富楼那は声聞でありながら菩薩の道を説き、利他行を積んでいたので、仏に成ることが約束されたのです。

法華経　日めくり

令和６年 甲辰
２０２４年
６月　２日　日曜

大安　胃
旧４月26日

妙法蓮華経五百弟子授記品第八

処処貪著（しょしょとんじゃく）

「人それぞれが貪り求めるもの」

貪り求めるものは、人それぞれ違います。生まれ持った性格や置かれた環境によって、欲するものが変わり、特有の迷いが生じます。私たちは自分の心の中にどんな願いを持っているのかさえ分からないことがあります。仏さまはそれをよくご承知の上で、その迷いから遠ざかることができるようにと広大無辺の教えを説いてくださったのです。その教えを学ぼうと欲する心が最も大事です。

法華経　日めくり

令和６年 甲辰
２０２４年
６月　３日　月曜

赤口　昴
旧４月27日

妙法蓮華経五百弟子授記品第八

常能審諦（じょうのう しんたい）　清浄説法（しょうじょう せっぽう）

「審諦かつ清浄に法を説く」

「審諦」とは、詳しく徹底的に説いて、聴く者に疑惑を生じさせないことです。

「清浄に説く」とは、法を説くこと以外に何も考えずに説くということです。

法を説くことによって、認められたい・報酬が欲しいなど余計なことを考えずにいるのは容易ではありません。

富楼那は、審諦かつ清浄に法を説いてきたから授記を得たのです。

法華経　日めくり

令和６年 甲辰
２０２４年
６月　４日　火曜

先勝　畢
旧４月28日

妙法蓮華経五百弟子授記品第八

而富楼那（にふるな）　以斯方便（いしほうべん）

「富楼那は方便を以て人々を導く」

富楼那は声聞でありながら菩薩の徳を具えていたのですが、方便をもって自分を低く見せて人々を導いてきました。
偉ぶっていると人々はついてきません。
同じ視線で親しく教えを説くことによって、人々が仏の智慧を求めようという思いを起こすのです。
そして、数えきれないほど多くの人々を教化し悟りに導いたのです。

法華経　日めくり

令和６年 甲辰

２０２４年

6月 5日 水曜

友引 觜

旧４月 29 日

妙法蓮華経五百弟子授記品第八

七仏（しちぶつ）

「過去世において説法をされた七仏」

「七仏」とは、過去世において説法をされた①毘婆尸仏（びばしぶつ）②尸棄仏（しきぶつ）③毘舎婆仏（びしゃばぶつ）④拘留孫仏（くるそんぶつ）⑤拘那含仏（くなごんぶつ）⑥迦葉仏（かしょうぶつ）の六仏と⑦お釈迦さまとを合わせた七仏。

七仏が説いた『七仏通戒偈』は「諸の悪をなすことなく、諸の善を行い、自らの意を浄くする、是れ諸仏の教えなり」という仏教の根本を説いた偈文として知られています。

法華経　日めくり

令和６年 甲辰
２０２４年
６月 **6** 日 木曜

芒種
大安 参
旧５月１日

妙法蓮華経五百弟子授記品第八

人天交接（にんでんきょうしょう）　両得相見（りょうとっそうけん）

「人間界と天上界の者の心が通じ合う」

天上界は物質の支配を離れた心の世界で、人間界とは別世界のように思われていますが、人間界に仏さまの教えが弘まれば煩悩が除かれて、天上界との隔てがなくなります。そして、天上界と人間界の者たちの心がお互いに通じ合って、共に仏さまに相まみえることができるというのです。天上界と人間界が力を合わせて、仏さまの教えを弘めていこうと心が固まったのです。

法華経　日めくり

令和６年 甲辰
２０２４年
６月　７日　金曜

赤口 井
旧５月２日

妙法蓮華経五百弟子授記品第八

亦無女人（やくむにょにん）

「また女人無く」

「女人無く」とは、女性が劣っているということではなく、男女の区別なく仏に成れるということです。
大乗仏教ではすべての人が仏性を具えているので、富楼那が仏と成った仏国土では性別は不要となるということです。
男女の区別だけなく、身分や貧富の差もなく、皆が等しく救われ、覚りに至ることができるのが仏さまの国なのです。

妙法蓮華経五百弟子受記品第八

爾時富楼那弥多羅尼子。従仏聞是。智慧方便。随宜説法。又聞授諸大弟子。阿耨多羅三藐三菩提記。

〈略〉

若干種性。以方便知見。而為説法。抜出衆生。処処貪著。我等於仏功徳。言不能宣。唯仏世尊。能知我等。深心本願。爾時仏告諸比丘。汝等見是。富楼那弥多羅尼子不。我常称其。於説法人中。

〈略〉

過去。九十億諸仏所。護持助宣。仏之正法。於彼説法人中。亦最第一。又於諸仏。所説空法。明了通達。得四無碍智。常能審諦。清浄説法。無有疑惑。具足菩薩。神通之力。随其寿命。常修梵行。彼仏世人。咸皆謂之。実是声聞。而富楼那。以斯方便。饒益無量。百千衆生。又化無量。阿僧祇人。

〈略〉

為浄仏土故。常勤精進。教化衆生。漸漸具足。菩薩之道。過無量阿僧祇劫。当於此土。得阿耨多羅三藐三菩提。号曰法明如来。応供。正気知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。仏。世尊。其仏以恒河沙等。三千大千世界。為一仏土。七宝為地。地平如掌。無有山陵。渓澗溝壑。七宝臺観。充満其中。諸天宮殿。近処虚空。人天交接。両得相見。無諸悪道。亦無女人。一切衆生。

法華経　日めくり

令和６年 甲辰
２０２４年
６月　８日　土曜

先勝　鬼
旧５月３日

妙法蓮華経五百弟子授記品第八

身出光明（しんすいこうみょう）　飛行自在（ひぎょうじざい）

「身より光明を出だし、飛行自在ならん」

「身出光明」とは、身体が光り周囲を照らすように、その人の徳が周囲を感化すること。

「飛行自在」とは、覚りに至ればどのような境遇においても、心が囚われることなく世間の制限を離れ、自在に活動できるということ。

そして心身が自在になれば、自然と姿かたちもそれにふさわしく仏さまの「三十二相」までが表れてくるというのです。

法華経　日めくり

令和６年 甲辰
２０２４年
６月 **9** 日

友引 柳
旧５月４日
日曜

妙法蓮華経五百弟子授記品第八

一者法喜食（いっしゃほうきじき） 二者禅悦食（にしゃぜんねつじき）

「教えを理解した喜びと教えが身になった悦び」

「法喜食」とは、仏さまの教えを聞き深い意味を理解し、大いなる喜びを感じること。「禅悦食」とは、仏さまの教えを聞いて理解しただけではなく、さらに自分の境遇に比べ合わせ消化して自分のものとすること。御馳走を食べて満腹で幸福になるのが「法喜食」、食物が消化されて血肉となり生きる力となった喜びを感じるのが「禅悦食」です。教えをいただく上で双方が大事なのです。

法華経　日めくり

令和６年 甲辰
２０２４年
６月 **10**日 月曜

先負 欲し
旧５月５日

妙法蓮華経五百弟子授記品第八

六通（ろくつう）三明（さんみょう）

「仏・菩薩がもつの六つの力」

仏・菩薩が定・慧によって得る六種の力。
時間軸・空間軸を超えて物事を知る智慧。
六通とは、①天眼通；肉眼で見えないものを見る力　②天耳通；耳に聞こえない音声を聞く力　③他心通；他人の心を見通す力　④宿命通；過去の宿世を知る力　⑤神足通；意のままに行動できる力　⑥漏尽通；自在に煩悩を断ずる力。
六通のうち宿命通・天眼通・漏尽通にあたる

法華経　日めくり

令和６年 甲辰
２０２４年
６月 **11** 日 火曜

大安 翼
旧５月６日

妙法蓮華経五百弟子授記品第八

八解脱（はちげだつ）

「阿羅漢が得る八種の解脱の境地」

「解脱」とは、すべての煩悩や障礙等の繋縛から解きはなされ、迷いから脱すること。
「八解脱」は阿羅漢が得る八種の解脱の境地。
①自らの貪が起こらなくなった境地　②貪が確実に起こらなくなった境地　③貪が全く起こらなくなった境地　④空無辺処を得た境地　⑤識無辺処を得た境地　⑥無所有処を得た境地、⑦非想非非想処を得た境地　⑧滅尽定を得た境地。　以上八種の解脱の段階。

法華経　日めくり

令和６年 甲辰
２０２４年
６月 12日 水曜

大安 翼
旧５月７日

妙法蓮華経五百弟子授記品第八

内秘菩薩行（ないひぼさつぎょう） 外現是声聞（げげんぜしょうもん）

「内に菩薩の行を秘め、外に声聞の姿を現す」

悟りに近づくのは容易ではありません。
多くの人々を導くのだと菩薩の心を持って、
皆と共に歩まねばなりません。
その際には周囲と同じ視点に立ち、相手の立
場で導かなければ教えは広まりません。
理解が深く説法が上手くても、上から見下す
ような態度では受け入れられないものです。
心の内に熱い思いを秘め、外見は他の修行者
に寄り添いながら、それが大事です。

法華経　日めくり

令和６年 甲辰
２０２４年
６月 **13** 日 木曜

赤口 婁
旧５月８日

妙法蓮華経五百弟子授記品第八

示衆有三毒　又現邪見相
（じしゅうさんどく　うげんじゃけんそう）

「三毒を除ききれず、邪見も者だと示す」

自分は貪瞋痴の三毒を除くことができず、物を正しく見ることができない者であると示し、理解の浅い者に親しく近づき導くのも大事です。

外道（インドにおける仏教以外の宗教や思想）の人々を教化する際には、相手に畏れはばかる心を起こさせないように努め、親しく交わりながら大乗に導くのです。

外道は仏教に入る前段階であり、仏教は方便

法華経　日めくり

令和６年 甲辰
２０２４年
６月 14日 金曜

先勝 角
旧５月９日

妙法蓮華経五百弟子授記品第八

千二百阿羅漢の授記
（せんにひゃくあらかんじゅき）

「千二百阿羅漢の授記」

舎利弗や富楼那らが授記を得たのを目の当たりにした千二百人の阿羅漢たちは、自分たちもお釈迦さまから授記を得られたならどんなに喜ばしいことだろうと思い描きました。その思いを知ったお釈迦さまは、千二百人の阿羅漢たちにも授記を与えることを約束し、先ず初転法輪の五比丘の一人、憍陳如（きょうじんにょ）に「普明如来」という仏に成るという授記を与えました。

妙法蓮華経五百弟子授記品第八

人天交接。両得相見。無諸悪道。亦無女人。一切衆生。皆以化生。無有婬欲。得大神通。身出光明。飛行自在。志念堅固。精進智慧。普皆金色。三十二相。而自荘厳。其国衆生。常以二食。一者法喜食。二者禅悦食。有無量阿僧祇千万億那由佗。諸菩薩衆。得大神通。四無礙智。善能教化。衆生之類。其声聞衆。算数校計。所不能知。皆得具足。六通三明。及八解脱。其仏国土。有如是等。無量功徳。荘厳成就。劫名宝明。国名善浄。其仏寿命。無量阿僧祇劫。法住甚久。

〈略〉

度脱無量衆　皆悉得成就　雖小欲懈怠　漸当令作仏　内秘菩薩行　外現是声聞
小欲嬰生死　実自浄仏土　示衆有三毒　又現邪見相　我弟子如是　方便度衆生

〈略〉

爾時千二百阿羅漢。心自在者。作是念。我等歓喜。得未曾有。若世尊各見授記。如余大弟子者。不亦快乎。仏知此等。心之所念。告摩訶迦葉。是千二百阿羅漢。

法華経　日めくり

令和６年　甲辰
２０２４年
６月 15日 土曜

友引　亢
旧５月10日

妙法蓮華経五百弟子授記品第八

五百人（ごひゃくにん）の阿羅漢（あらかん）の授記（じゅき）

「五百人の阿羅漢の授記」

千二百人の阿羅漢の次に、五百人の阿羅漢にも仏に成るとお釈迦さまは授記を与えました。

その中には、優楼頻螺迦葉（うるびんらかしょう）・伽耶迦葉（がやかしょう）・那提迦葉（なだいかしょう）・迦留陀夷（かるだい）・優陀夷（うだい）・阿嵬楼駄（あぬるだ）・離婆多（りはた）・劫賓那（こうひんな）・薄拘羅（はくら）等、『序品』に名前が挙がったお釈迦さまの弟子たちがいます。

法華経　日めくり

令和６年 甲辰
２０２４年
６月 16日

先負 氏
旧５月 11 日
日曜

妙法蓮華経五百弟子授記品第八

周陀（しゅだ）の授記（じゅき）

「周陀の授記」

授記を与えられた五百人の阿羅漢で名前を挙げられたなかに、周陀（しゅだ）がいます。周陀は須梨槃特（しゅりはんどく）とも呼ばれます。物覚えの悪かった周陀にお釈迦さまは一枚の布を与え、「塵を除く、垢を除く」と唱えさせ、精舎を払浄させました。それにより、周陀は落とすべき汚れとは貪瞋痴の三毒だと悟り煩悩を滅して阿羅漢果となり、さらに仏に成ると授記を得たのです。

法華経　日めくり

令和６年 甲辰
２０２４年
６月 17 日 月曜

仏滅 房
旧５月１２日

妙法蓮華経五百弟子授記品第八

莎伽陀（しゃかだ）の授記（じゅき）

「莎伽陀の授記」

授記を与えられた五百人の阿羅漢で名前を挙げられたもう一人、莎伽陀（しゃかだ）。莎伽陀は村人の依頼に応じ神通力を使って毒龍を退治し、村人からの供養の酒を飲み、酩酊してしまいました。これによってお釈迦さまが「不穏受戒」を定めたと伝えられています。「衣裏繋珠の喩え」で酒に酔いつぶれた男の話の伏線にも思えます。

法華経　日めくり

令和６年 甲辰
２０２４年
６月 18日 火曜

大安 心
旧５月 13 日

妙法蓮華経五百弟子授記品第八

法滅天人憂（ほうめつてんにんぬ）

「法滅せば天・人憂えん」

末法になり仏さまの教えが滅したら、天上界・人間界の者たちは心憂い、世は暗くなります。しかしそのようなときにも、仏さまの教えは光を増し、暗い世を照らし出します。そしてその光が、この苦しい世の中を良くしていこうと教えを求める人に届きます。はじめは一人でも、百人・千人と膨らんで、大きな流れになっていくものです。それが法華経が末法に留め置かれた意味です。

法華経　日めくり

令和６年 甲辰
２０２４年
６月 **19** 日 水曜

赤口 尾
旧５月 14 日

妙法蓮華経五百弟子授記品第八

我滅度之後（がめつどしご） 某甲当作仏（むこうとうさぶつ）

「我が滅度の後に、某甲（それがし）まさに作仏すべし」

お釈迦さまが方便のため姿を消し滅度して、世の中が暗くなり険悪になることがあっても、その教えが滅び尽くすということはありません。暗い中でも某（名前は分からない誰か）が仏に成り、その教えを聞く者たちが皆歓喜して教えを受け継いでいくというのです。涅槃に入り姿を消したり、迷いを解くことから始めたりするなどの様々な方便を用いて、後継者を育てるのが仏さまの導き方です。

法華経　日めくり

令和６年 甲辰
２０２４年
６月 20日 木曜

先勝 箕
旧５月１５日

妙法蓮華経五百弟子授記品第八

其不在此会（ごふざいしえ） 汝当為宣説（にょとういせんせつ）

「この場にいない者にも、仏に成れると伝えるように」

お釈迦さまはその法灯を継ぐ迦葉尊者に、この場にいない者にも仏に成れると伝えるようにとお告げになりました。

「この場にいない者」とは『方便品』で説法の場から立ち去った「五千起去」の声聞のことです。

その場で伝えても理解されないこと見越し、苦労を重ね、難しい教えを受け入れられる機根を整えて戻ってきたときに、「仏に成れる」と伝え

法華経　日めくり

令和６年 甲辰
２０２４年
６月 **21** 日 金曜

夏至
友引 斗
旧５月 16 日

妙法蓮華経五百弟子授記品第八

今乃知之（こんないちし）　如無智者（にょむちしゃ）

「今自分たちは智慧のないものだと知りました」

授記を得た五百人の阿羅漢たちは自らを振り返り、今までの自分は無智の者であり、これからの修行が大事であると気づいたと告白します。自分一人が世の中の煩わしさを離れて送る浄らかな生活は、少しの智慧で足りているものだと気づいたのです。仏さまの心持ちを自分のものとして、世の中で苦しんでいるすべての人たちを救うことに努めることが仏に近づく道だと知ったのです。

妙法蓮華経五百弟子授記品第八

其五百阿羅漢。優楼頻螺迦葉。伽耶迦葉。那提迦葉。迦留陀夷。優陀夷。阿傾楼駄。離婆多。劫賓那。薄拘羅。周陀。莎伽陀等。皆当得阿耨多羅三藐三菩提。尽同一号。名曰普明。爾時世尊。欲重宣此義。而説偈言

〈略〉

像法復倍是　法滅天人憂　其五百比丘　次第当作仏　同号曰普明　転次而授記
我滅度之後　某甲常作仏　其所化世間　亦如我今日　国土之厳浄　及諸神通力
菩薩声聞衆　正法及像法　寿命劫多少　皆如上所説　迦葉汝已知　五百自在者
余諸声聞衆　亦当復如是　其不在此会　汝当為宣説

爾時五百阿羅漢。於仏前。得受記已。歓喜踊躍。即従座起。到於仏前。頭面礼足。悔過自責。世尊。我等常作是念。自謂已得。究竟滅度。今乃知之。如無智者。所以者何。我等応得。如来智慧。而便自以。小智為足。

法華経　日めくり

令和６年 甲辰
２０２４年
６月 22日 土曜

先負 女
旧５月 17 日

妙法蓮華経五百弟子授記品第八

衣裏繋珠（えりけいじゅ）の喩（たと）え１

「宝珠に気づかず」

あるとき、貧しい男が裕福な親友の家でご馳走になり、酒に酔いつぶれて寝てしまいます。親友は、男が寝ているうちに衣服の裏に高価な宝珠を縫いつけて仕事に出かけました。男はそれを知らず、長い間わずかな収入を得る仕事に就いて満足していました。再び二人が出会ったとき、親友は男が宝珠に気づかず貧しい生活を続けている愚かさを諭し、宝珠を元手に商売をするように勧めました。

法華経　日めくり

令和６年 甲辰
２０２４年
６月 23日

仏滅 虚
旧５月 18 日
日曜

妙法蓮華経五百弟子授記品第八

衣裏繋珠（えりけいじゅ）の喩（たと）え２

「機が熟し法華経に出会う」

この喩え話の「親友」はお釈迦さま、「貧しい男」は仏弟子や私たち衆生を指しています。

私たちは、はるか昔からお釈迦さまの教えをいただいていたのに、自分が仏と成るという心を起さず、方便の教えに満足していました。

しかし、今ようやく機が熟し、再びお釈迦さまに巡り逢い、はじめて法華経の教えを心の底から信じ、素直に喜びをもって聞き入れ、自分から仏と成ることを強く求めたのです。

法華経　日めくり

令和６年 甲辰
２０２４年
６月 24日 月曜

大安　危
旧５月 19 日

妙法蓮華経五百弟子授記品第八

其人（ごにん）酔（すい）臥（が）　都（と）不（ふ）覚（かく）知（ち）

「その人酔い臥して、すべて覚知せず」

衣の裏に縫い付けられた宝珠とは、私たちが生まれながらに持っている仏性のことです。仏さまが持たせてくれた宝珠のことを、酔いつぶれて忘れてしまったかのように気づくこともなく、磨こうともしないのは本当にもったいないことです。

一人ひとりの小さな珠を大切に磨いて、大きくなるように育てていけば、やがて光り輝く仏の国をつくれるかもしれません。

法華経　日めくり

令和６年 甲辰
２０２４年
６月 25日 火曜

赤口 室
旧５月 20 日

妙法蓮華経五百弟子授記品第八

仏亦如是（ぶっちゃくにょぜ）

「仏も亦　是くの如し」

宝珠に気づかず暮らしていた男を親友が諭したのと同じように、私たちが持っている仏性を磨くようにと、仏さまは諭されているのです。この仏性を大切に磨き、大きく伸ばしていけば、人を救い世の中の役に立つ力となります。今はまだ役に立たないほど小さい一人ひとりの仏性が育つようにと、仏さまは見守り、導いてくださいます。
酔いを醒まし、自らの珠を磨きましょう。

法華経　日めくり

令和６年 甲辰
２０２４年
６月 26日 水曜

先勝 壁
旧５月 22 日

妙法蓮華経五百弟子授記品第八

一切智願　猶在不失
いっさいちがん　ゆうざいふしつ

「仏の智慧を求める願いは消えることはない」

阿羅漢たちは、これが真の悟りだと思い世間を離れ静かに修行をしていながらも、何か物足りないと感じていました。
それは人を救い、世のために尽くしたいという要求が心の奥にあったからです。
「一切智願」とは仏の智慧を具えたいという願いであり、その願いは心の奥にあり、消えてしまうことがないからです。
その願いを持ち続ける心こそが仏性なのです。

法華経　日めくり

令和６年 甲辰
２０２４年
６月 27 日 木曜

友引 奎
旧５月 23 日

妙法蓮華経五百弟子授記品第八

令種無上願（りょうしゅむじょうがん）

「一切の人を救い仏に成ろうという願い」

「無上願」とは一切の人を救い、仏に成ろうという願いであり、「四弘誓願」といわれるものです。

①衆生無辺誓願度；一切衆生を悟りの彼岸に渡す
②煩悩無数誓願断；衆生の煩悩をすべて断じ尽す
③法門無尽誓願知；一切の法門を知り尽す
④仏道無上誓願成；無上の仏道を行じ成就する

授記を得た憍陳如をはじめ、千二百の阿羅漢と五百の阿羅漢たちは、この大願に目覚め、菩薩

法華経　日めくり

令和６年 甲辰
２０２４年
6月28日 金曜

先負 妻
旧５月23日

妙法蓮華経学無学人記品第九

学無学（がくむがく）

「学びの途中の者と学ぶことが無くなった者」

「学」とは、まだ学ぶことが有る人のこと。
「無学」とは、すでに真理を究め尽くして煩悩を断じ、もう学ぶことが無い人のこと。
「学」は学びが足りないため、また「無学」は自分だけの学びであったため、仏には成れないといわれていました。
しかし、法華経を信じ、人々の幸せのために励めば仏に成れると、お釈迦さまは授記を与えたのです。

法華経　日めくり

令和６年 甲辰
２０２４年
6月29日 土曜

仏滅 胃
旧５月24日

妙法蓮華経学無学人記品第九

阿難（あなん）

「お釈迦さまの十大弟子、多聞第一」

阿難は、お釈迦さまの十大弟子の一人で、多聞第一といわれ、お釈迦さまの従弟に当ります。常にお釈迦さまに随侍し聞法の機会を得たので、お釈迦さま入滅後、お釈迦さまの教えを口述し、仏典が編纂されました。

阿難は、お釈迦さまの在世中には悟ることができず、後に大迦葉により悟りを開きました。

『人記品』では、山海慧自在通王仏になると授記されます。

法華経　日めくり

令和６年 甲辰
２０２４年
6月30日
日曜

大安 昴
旧５月 25 日

妙法蓮華経学無学人記品第九

羅睺羅（らごら）

「お釈迦さまの息子、十大弟子、密行第一」

お釈迦さまが王子であったとき、出家の決心をした際に生れたため「我が破らねばならぬ障碍（ラーフラ）ができた」と言われたことから名づけられたという説があります。

羅睺羅は、十五歳で出家し二十歳で比丘となり、父の威信を傷つけまいと密かに苦行し、十大弟子の一人、密行第一と称せられました。

『人記品』では蹈七宝華如来になるであろうと授記されます。